



展示評 国立歴史民俗博物館企画展示「いにしえが、好きっ！」（時評・書評・展示評）

須藤， 宏

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:113-119

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489541>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489541>



展示評 国立歴史民俗博物館 企画展示「いにしえが、好きっ！」

須藤 宏

一 はじめに

江戸時代後期に作成された『れいしちやくくしゅつちちよう 聆涛閣集古帖』を核として、掲載の古物やその作成者である呉田の吉田家、江戸時代後期に熟成した好古家ネットワークについて紹介する企画展『いにしえが、好きっ！——近世好古図録の文化誌——』が二〇二三年三月七日から五月七日までの六二日間、佐倉市の国立歴史民俗博物館（以下歴博）において開催された。

『聆涛閣集古帖』は「聆涛閣古物カタログ」の意で、家藏品にとどまらず日本各地の古器物二千四百点を精緻な模写図や拓本で収録する図譜である。「聆涛閣」の名は、「聆」が「聞く」、「涛」が「怒涛」の「涛」で「大波」、「閣」が「書庫」で、

灘の海岸沿い、現在の神戸市東灘区住吉南町（呉田地区）にあった吉田家の書庫の名としてふさわしい。江戸時代の海岸線は現在の国道四三号線（当時の浜街道）のすぐ南側である。

神戸にかかわる史・資料の展示が遠い佐倉で行われるのはもちろん『聆涛閣集古帖』（以下引用部以外は『集古帖』）が歴博の所藏品であるからだ、二〇〇四年に購入されたこの史料は、江戸後期



企画展示

「いにしえが、好きっ！——近世好古図録の文化誌——」

会期 2023年3月7日（火）～
5月7日（日）

会場 国立歴史民俗博物館

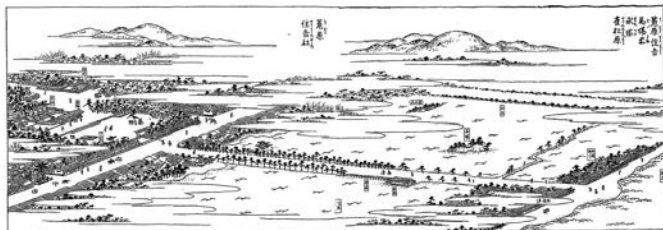


図 寛政年間の住吉村（『摂津名所図会』挿図を合成）
左に現在の本住吉神社 参道を下った海岸沿いが呉田

における文化活動の高まりを示すものとして常設展示されている史料でもある。このたびの展示は、藤原重雄氏を研究代表者として二〇一七年度から二〇一九年度に行われた歴博の共同研究『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究^①の成果を披歴するもので、二〇一九年十二月には吉田家の酒蔵があった現在の白鶴酒造株式会社の本社ビル会議室において研究成果の報告会が行われている^②。

聆涛閣に収蔵された文書・古器物は近代以降徐々に吉田家の手を離れ、第二次世界大戦直後の混乱期に最終的に散逸するが、吉田家に残った資料で住吉歴史資料館に寄託されたものや買い戻し品など二二八点が二〇二三年一月三一日に「神戸歴史遺産6『住吉村吉田家関係資料』」に指定されている^③。

二 展示構成・イベント・図録

歴博企画展室A・Bの二室を会場とし、五章からなるテーマで展示が展開された。第一章から第三章が『聆涛閣帖』と呉田吉田家、第四章と第五章が江戸時代・明治時代初期の好古家のネットワークについての展示となっている。章・項目立ては以下の通り。

第一章『聆涛閣集古帖』とはなにか（企画展室A）

一―一『聆涛閣集古帖』と考古資料

一―二『聆涛閣集古帖』と文書・典籍

一―三『聆涛閣集古帖』と調度品・工芸品

一―四『聆涛閣集古帖』と図像資料

第二章『聆涛閣集古帖』を伝えた吉田家（企画展室A）

二―一好古家三代・吉田家の実像

二―二『聆涛閣集古帖』の成立とその周辺

第三章 よみがえる聆涛閣コレクション（企画展室B）

第四章 正倉院宝物の「発見」（企画展室B）

穂井田忠友・正倉院宝物図・正倉院宝物模造

第五章『聆涛閣集古帖』をとりまく好古家ネットワーク

（企画展室B）

藤貞幹・復古内裏・集古十種の編纂・松浦武四郎

会期中の三月十一日に歴博講堂において第四四三回歴博講演会として三上喜孝氏・一戸渉氏・藤原重雄氏による講演、四月一日に第一一五回歴博フォーラム「いにしへの『玉手箱』、近世好古図録をひらく」として吉田広氏・村野正景氏・清水健氏・落合里麻氏・加藤明恵氏・山下大輔氏による講演が行

われ、さらに関連イベントとして四月十五日、神戸市の御影公会堂において「よみがえる聆涛閣コレクション」と題し藪田貫氏・三上喜孝氏・須藤宏・加藤明恵氏・古市晃氏による講演が行われた。⁴⁾

図録はA4判二五四ページ、二四二〇円（税込）。

三 所感

展示内容は広汎にわたるもので、その全体に対する評価など筆者の能力をはるかに超える。以下展示の一部を紹介し、所感を述べるにとどまることは予めご了承頂きたい。

「第一章『聆涛閣集古帖』とはなにか」では、『集古帖』・版本『聆涛閣帖』に掲載される考古資料、古文書・典籍、調度品・工芸品、図像資料の実物をその画像と並べ展示する。

展示室に入って最初に目に入るのが馬形埴輪頭部と須恵器樽形甕^{はせう}。版本『聆涛閣帖』と同じ配置・向きで実物が展示される。両者を見比べることにより、その形や文様だけでなく、割れ口や器面の小傷なども正確に写し取られていることを確認できる。

もちろん模写・採拓は一人が行ったものではなく、巧拙が

ある。基本的には室内で臨写されたものは立体物であっても精緻な図となっており、そうではない野外等、模写の条件が整わない場所でのそれは現地スケッチ的なものにとどまる。

『集古帖』では三二種に資料が分類され、これに従い各冊にまとめられる。文字にかかわることが大きなポイントになっているのが江戸文人趣味によることは解説のとおりで、江戸時代の古物（古器旧物）学から現在の文化財学に至る資料の認識・分類の違い・変遷には興味深いものがある。⁵⁾

「1―15 銅鐸」は出土地不明だったが『集古帖』掲載の拓本と同じものであることが昭和八年梅原末治氏により報告され、寛政八年、現在の守山市新庄出土であることが判明した。⁶⁾ 古く銅鐸は阿育王の宝鐸とも考えられたことが、「鐘銘」冊に収められた理由だろう。

気になるのが「鈴鐸」冊の「1―27 隠岐国駅鈴」。展示されていたのはレプリカであるが解説に「原品・中世か」とある。文化庁の国指定文化財データベースでも「中世時代の資料」とあり駅伝制のない中世に作られた駅鈴というのはよくわからない。

「参考1―10 長田神社石燈籠（雨乞いの石燈籠）」はいかにも現地スケッチであるが、よく見ると中台の花弁が上面側

になっている。江戸時代後期、中台が逆さに置かれていたことを確認でき興味深い。

第一章で『集古帖』の凄さをこれでもかと見せつけられた後、第二章ではこれをまとめた吉田家が紹介され、他の古物図譜との対比により『集古帖』の成立過程に迫る。

十七代当主道可が大きく家業を繁栄させ、コレクションのもとを形成したことがこれまでに知られていたが、大実業家であるとともに「俳諧、漢詩文、儒学、医学、和歌、書道」、庸軒流の茶道を嗜んだことを示す史料が展示で示され、その多才ぶりに驚かされる。また、次代の道圓とともに徳本上人を三年住吉に招くなど信仰心にも篤く、さらに「仁恵の心篤くして、郷里の下民窮農などを撫育扶助し、陰徳を専行ひしなり、この事は既に、官聴に達せしとて、寛政年間に、ご褒美を賜りし程」だという。

第三章では吉田家蔵品であったことの確認できる古物が展示される。国宝である泉屋博古館所蔵の「3-1 線刻釈迦三尊等鏡像」は伝来が不明であったが、『集古帖』に拓影があり、その見出しにより伯耆国大山出土であることが今回明らかになったと紹介されるなど新知見続出。

『集古帖』掲載の銅鐸は新庄銅鐸のみだが、山川正宣『銅

鐸獲例考』により、図録「3-4」の松平乗統旧蔵銅鐸や満願寺銅鐸も保有していたことが確認できる。⁽⁹⁾ 馬形埴輪も兼葭堂旧蔵であることが野里梅園の『標有梅』の記載から知られており、三代の間にも好古家間で古物の移動があったことを確認できる。

「3-2 三角縁吾作銘二神二獣鏡」は同範鏡が現在二面知られる。この拓本がどちらの鏡のものなのかあるいはどちらでもない別のものであるのかは極めがたいと資料解説はあくまでも慎重であるが、鏡の腐食やヒビとの対応から奈良市弥勒寺鏡と認めてよいのではないか。⁽¹⁰⁾

第四章ではまず天保四年の正倉院開封にあたり、奈良奉行梶井良材の配下として正倉院文書の整理や宝物の図化を行った穂井田忠友が紹介される。続いて江戸時代数回行われた正倉院開封の際の宝物調査、また明治五年の社寺宝物調査（壬申検査）、および模写・模造された宝物が紹介される。

ただ「宝物全体を見渡した本格的な調査」は壬申検査以降であるとして江戸時代の整理は軽くふれられるにとどまる。その評価は別としても、『集古帖』掲載の禁裏・東大寺関係のソースとなったことで分かるように吉田家と深いつながりを持つ穂井田忠友が中心となつて三年をかけて行われ、正倉

院文書正集五十巻が整理された天保の開封之儀についてはきちんと紹介してほしかった。

第五章では好古家のネットワークについて紹介される。『集古十種』に吉田家蔵品が掲載されたり、名取川の埋木で作った文台が松平定信から道可に贈られたり、二人の間に接点のあることは以前から知られていたが、¹¹具体的な関係はほとんど明らかではなかった。しかし、今回の共同研究などにより『集古十種』の西国取材にあたつて兼葭堂や道可などの好古ネットワークの協力があつたことやその成立過程を示す史料が明らかにされている。¹²道可の容貌を伝える「参考2―2近世名家肖像図巻」は寛政八年の取材の際の文晁のスケッチ「参考2―1画学斎過眼図彙」をもとに描かれたものであつたことが紹介されるなどは興味深い。

吉田家三代にならぶような好古家ではあるものの現在忘れられている人物に大坂惣年寄であつた野里梅園がいる。「2―21 聆涛閣帖」の織氈は梅園の「2―26 梅園奇賞」に「法隆寺所伝織氈」とあるものと同じものであるが、梅園の集古帖である加賀文庫『標有梅』¹³一にはその全形が写され、織りを示すために拓本まで採っている。また「法隆寺有所西園院古氈太子御氈之紋」とさらに詳しい情報も書かれる。筆者は

かつて加賀文庫の『標有梅』を見てその情報の凄さに仰天した。梅園の好古ネットワークの先には梶井良材・水野忠邦などもいる。大坂の人がまとめたものではあるが江戸時代の一級資料として加賀文庫『標有梅』のインターネット公開が待ち遠しい。

展示の最後は、二度にわたり吉田家を訪れ、貴重な情報を残した松浦武四郎の一疊敷。明治十二年、数え六二歳の武四郎は吉田家訪問の二日前、四月二十七日に神戸駅から有馬街道（現在の国道四二八号線）を上り小部峠を越え、¹⁴栗落花家、東下村の鷺尾家、さらに衝原村の箱木千年家を訪ねている（ナビタイムによれば行程一六・三キロメートル）。箱木家では棟札の写し二、三枚と男竹と女竹の古材を貰っている。この竹材は一疊敷の書棚椽の下の外側風入れに使われた¹⁵のことだが現状は無くなっている¹⁶のことで残念。

これまで地元においてすら知る人ぞ知る存在であつた聆涛閣の展示も、新聞・テレビなどのメディアで取り上げられ内容が知られるに従い、しり上がりに観覧者が増えたと聞く。遠い佐倉での開催ということで、神戸からの観覧者は数が限られていたが、地元での周知・宣伝を兼ねて神戸大との共催

で行われた関連講演会には定員を大幅に超える聴講希望者があり、その聴講をきっかけに佐倉を訪ねた人もあったようだ。現在インターネットで歴博開催の公開講座が視聴できるが、¹⁷⁾その公開日が五月六日、会期残り二日であったというのはなんともつたない。講演会当日の配信など展示期間中の発信があれば展示への興味を惹き、会場へ足を運ぶきっかけになったのではないか。この点残念であった。

聆涛閣コレクションの全国デビューとなる今回の企画展はその一部を紹介し得たに過ぎないが、かつて正木直彦氏が「集古十種は素人の手に成り集古帖は玄人の手に成ったともいへる。(中略)集古十種はすべてが原物から見れば複写縮写であるから自ら価値が少い。(中略)集古図(＝『集古帖』)はすべて(ではないが…引用者)実物実写の原本原拓ものである故に根本の資料である点が最大の価値である」¹⁸⁾とまで評価したコレクションであることは肯けるだろう。

忘れられかけていた住吉の吉田家また聆涛閣が全国に周知されたことは地元民として大変うれしい。しかも共同研究という形で全国各地の専門家がそれぞれの視点から検討して今回の成果が上げられたわけで、『集古帖』が歴博に収蔵されることになって本当に良かったと思う。

全国に四散した資料を探し出した博物館と研究者のネットワークには敬服する。展示図録の図版と解説、近々公開されるだろう『歴博研究報告』により、吉田家と『集古帖』に関する研究の現状は共有されることになる。無論二四〇〇点にもおよぶ資料の探求は未だしたが、『集古帖』は歴博のデータベース「Khin」¹⁹⁾でそのすべてを閲覧することができる。また、版本『聆涛閣帖』は二冊ともに東京国立博物館のウェブサイトで閲覧できる。²⁰⁾検討材料はインターネット上に公開されており、今後皆に開かれた現代のネットワークにより各地からの情報を共有できる体制が構築されればうれしい。そして十年後、それらをもとに新たに構成される「聆涛閣展2」が歴博と地元の博物館との共催・巡回展として開催されることを願いつつ筆を擱く。

註

- (1) 歴博ほか二〇一九『住吉の豪商・吉田家のお宝 まぼろしの聆涛閣コレクション』
- (2) 反町茂雄一九八九『一古書肆の思い出4 激流に梓さして』
- (3) https://www.city.kobe.lg.jp/documents/59885/2nd_gaiyousho.pdf
- (4) <https://www.rekihaku.ac.jp/events/forum/old/2023/pdf/115.pdf>
- (5) 久留島浩二二〇一六『古物(古器旧物)』から『文化財』へ「講座

- 明治維新11『明治維新と宗教・文化』、古谷毅二〇二〇「文化財保護法以前 考古・民俗資料の収集・研究と保護」『文化財の活用とは何か』
- (6) 梅原末治一九三三「銅鐸研究の一新資料」『考古学雑誌』一二一—四
- (7) 武庫郡住吉村一九四六「吉田道可」『住吉村誌』など
- (8) 資料解説「2—3 筆のすさび【翻刻】」
- (9) 辰馬悦藏一九四六『銅鐸獲例考』とその所掲の満願寺出土の銅鐸『西宮』三
- (10) 鐘方正樹二〇一一「弥勒寺蔵三角縁吾作銘二神二獣鏡について」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成二二（二〇〇九）年度』
- (11) 正木直彦一九三二「聆濤閣古文書と集古帖『美術研究』四
- (12) 加藤明恵二〇二二「吉田道可による松平定信『集古十種』編纂事業への支援と文化的交流」内田雅夫編『住吉の豪商 吉田家【論文篇】』所収、加藤明恵二〇二三『摂津国菟原郡住吉村』『住吉良運商社文書』の調査と史料紹介『灘の酒造家吉田家の文化・学術活動の研究 報告書』
- (13) 東京都立中央図書館蔵
- (13) 佐藤貞夫編二〇一五松浦武四郎『己卯記行』
- (14) 松浦武四郎一八八七『木片勸進』
- (15) ヘンリー・スミス一九九三『泰山荘松浦武四郎の一畳敷の世界』
https://www.youtube.com/watch?v=cD8CwHmHmJE
- (16) 正木直彦一九三二「聆濤閣古文書と集古帖『美術研究』四
https://khirin-id.rekihaku.ac.jp/

(20) https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/4478

※『いにしえが、好きっ！——近世好古図録の文化誌——』の展示解説が二〇二三年八月十二日に公開された。

https://www.youtube.com/watch?v=PgQ7XjS4Rc&t=1072s